



同志社人物誌 (37)

水 崎 基 一

森 中 章 光

長野県といえは、あの日本海に流れている
信濃川が、すぐ連想される。水崎先生が雅号
を濃川と称しておられたのも、先生の生まれ
故郷が松本であったことを知るならば、うな
ずけるであらう。

先生は明治四年生まれで、幼年時代はこの
静かな城下町で過ごされたのであるが、その
後家庭の事情で静岡に移られた。この静岡時
代に、奇しくも先生のうえに、摂理のみ手が
差しのべられたことは、先生の生涯にとって

は特に記憶されなければならない。というの
は、フトした機会に、ここではじめて先生は
キリスト教に接したのである。そして、好奇
心からながらも、宣教師や牧師が、キリ
スト教について語っていることを聞いている
うちに、いつしか感じやすい基一少年の心は
動きはじめたのである。少年は思った。「こ
の教えは、世人のいつているような邪教では
ない」と。かくして、少年はついに決心した
のだ。

後に先生はその略歴の中に、次のように書
いている。

『少年時代に静岡にあり。キリスト教を聞
きて感ずる所深く、それも教会に入りて、
善心得、誘惑に打ち勝ち、正しき生涯を
送らんと欲し、入会を決し……』

と。純真な少年の心は、強く動かされたので
ある。そして間もなく静岡メソジスト教会の
小林泰牧師から洗礼をうけた。時は明治一九
年六月の聖日。先生は未だ一五歳であつた。

* * *

先生が同志社普通学校に入学したのは、そ
れから三年後の、二二年であつた。先生はな
ぜ、静岡から近い東京の学校をえらばなかつ
たのであろう？ 察するに、二二年一月の
はじめには、あの堂々たる八千文字にも及ぶ
「同志社大学設立の旨意」が、全国の主要な新
聞や雑誌にいつせいに発表掲載されているの
だ。アンビションに燃えている基一青年にし
て、この一大教育宣言、この不朽ともいうべ
き大文章を見のがすようなことは、おそらく
なかったであらう。かれの感激はさだめし深
いものがあつたにちがいない。いわんや、か
れはすでに信者で、キリストの教えを奉じて

いるものなのだ。このときにおいて、かれの心が、東都でなく西京に強くひかれたたであらうことは、自然のことで疑うべくもない。

さて、希望に輝いて同志社に入学した基一青年は、ここにはじめて、この学校の創立者であり中心である校長新島襄という人物の風貌に近く接し、やがてその人格精神に対して深い敬慕の念を生じるようになったのである。だが、その新島校長は、はやくも同年の一〇月半ばには、大学設立運動のため、校務を代理校長に託して東上した。そして、わずか一百日余りの後には、人生ただ一人の師と仰いだ校長は、悲しいかな、霊柩の中に運ばれて京都の自邸に帰ったのである。七条の駅から自邸まで、かれもまた多くの学友とともに、みぞれ降る中に、霊柩を肩にのせて、ぬかるみの悪路を、涙を流しながら運んだ。それから、洛東若王子山上の墓地にも、かれはまた、柩をかついで黙々と登った。

その後三年の歳月はまたたく間に過ぎ去って、二六年の六月、かれは同級生四五名とともに、普通学校を卒業したのであるが、在学中かれの脳裡に深く印刻されたものは、今もなお、母校同志社に遺されている、先師新島

の標語であろう。それは丈余のうす水色のちりめん、勝海舟が揮毫したもので

『彼等は世より取らんとす 吾等は世に与へんと欲す』

とあるのだ。

基一青年は、たしかに、この先師の標語をかれ自身の生涯の標語として、かれの敬慕やまない先師が、同志社での学窓生活で、かれに与えられた唯一の貴重な記念の贈物である、かたく信じて、心の奥底に秘めながら、社会への第一歩を踏み出したことと思う。果たせるかな、かれの生涯は、りっぱにこの標語を実証せるものであったのだ。

* * *

卒業後のかれは、はじめ二カ年間北海道の集治監で囚人の教誨師をつとめ、ついで三カ年間台湾総督府の内事課に奉職したが、三二年再び修学を志して英国に留学し、エジンバラ大学及びロンドン大学で、政治経済史を研究。帰国したのが、三五年の初秋であった。当時の同志社校友会報には、次のようにかれの消息をつたえている。

『多年苦学、業漸く成りて六月九日英京を発し……、西伯利亞鉄道によりて無事帰朝

せし君は、目下神奈川に寓居して、日々横浜なる東洋汽船会社に出勤し、傍ら台湾協會学校の為に殖民史を講じつつあり。克己勵精、依然たる真面目、人は君を評してローカラーの大將となすぞ。世の輕跳浮薄の風、其身辺に近づくを許さざる所、正に其真骨頂を見る』

英国留学から帰国したかれは、従来の生活からその方向を転じて、実業界に入り、東洋汽船会社の社員に就職したのである。だが、校友会誌の消息にも報ぜられているように、その人物評は、後年の水崎先生を知るものにとっても、それは評してまことに妙をえたりといいたいのである。先生は勤勉な人であった。正直な人であった。飾らない人であった。そしてまじめな人であった。正義の人であった。情の人であった。

* * *

ところで、東洋汽船会社に在職数年の間に、やがて近い将来には、かれに対して新たな使命の途が、おもむろに開かれようとしていたのだ。もちろん、そのようなことは見えない聖手の導きによるもので、人間の知るところではなく、かれ自身もまたそれを覚るは

ずはなかったわけである。

ここで少しく同志社の歴史を、ふりかえってみなければならぬ。さきにも述べたように、青年水崎が同志社に入学したのは、新島先生が、大磯の客舎で、^なお杜図を抱き^なながら地上を去られた、その前年のことであったが、それがために、先生の大念願であった私立大学設立の理想も、ついに、その実現を見ることなくして終ったのだ。のみならず、先生の没後は、その創立者をうしない、大きな中心をなくした同志社は、先生在世当時のような激^{ハツ}湧たる生氣活力なくして、次第に衰退の一途をたどるのみであった。そして、ついに三二、三年のころには、教室の天井は蜘蛛が巣をはるにまかせ、十棟ばかりもあった寮舎は、ほとんど空家同然の有様となって、生徒の姿を見ることも極めて少なく、全校の在學生は二百にも足らない状態となった。新島先生が熱涙の祈りをもって創められた学校デビス、ラーネッド両師らと、同心協力、一切を献げて、幾多の苦難の中に、護り育ててこられた同志社、その同志社の運命は、まさに解散廢校の寸前まで、追いつめられたのである。

けれども、聖意をかたく信じて明治八年に發足した同志社の大きな使命は、決して亡失したのではなかった。新島先生は、すでに地上を去られたけれども、先生の精神は、なお生きていたのである。そして、それはなお先生の精神的血脈をついだ門下のうちに、生きてはたらきつつあったのだ。はたせるかな、かれらの中から血涙をしぼって、かれらの愛する心の故郷である母校の、再起復興の難業に、一身を挺^{たてま}してたちあがる志士が現れた。かくて、かれらの大いなる犠牲による苦心經營は、おむろに、その実を結びはじめ、生徒の数も数百を数えるまでになったのである。そして、さらに若王子山頭の先師の志に報いるため、まず何よりも教師の陣容をととのえる必要が感じられた。

水崎先生が、東洋汽船会社を辞して、母校の招聘に応じ、献身のかたい決意のもと、よろこんで、同志社専門学校経済科の教授として、その任に就いたのは、あだかも、そのときであった。時は四一年の四月初旬、なつかしい母校の校庭には、一面にクローバーが芽を出しはじめ、桜の花もぼつぼつ開きかけたころであった。本稿の筆者が同志社普通学校

第一年級に、編入試験をうけて入学したのは、この年の九月であつたから、水崎先生が母校に帰校されたのと同年で、先生がその後間もなく、同志社女学校出身のしげ子夫人を迎えられたことなど、級友からきかされたことがある。

* * *

さて同志社は、日とともに校勢を挽回して夕べともなれば、寮舎の窓からは、洋灯の光りもれぬ一室もなく、新島先生在世時代のように、毎朝チャペルからは、活気あふれる讚美の歌声が、校内にきこえてくるようになった。学校の前途には、まことに明るい希望が輝いたのである。

こうした洋々たる校勢発展の中にあつて、感激性の強い水崎先生のことであるから、先師のことを偲^{おも}はずにはいられなかった。大学運動のため、最後の血の一滴までも献げつくして、しかも中途にして逝かれた師のことをおもえば、その師の理想を実現し、大志を達成せしめるは、今こそ、われら門下の使命であり、また責任であると、痛感せずしてゐることはできなかったであらう。先生はついに決然とたちあがつて、自ら進んで、この間

題の点火者となつたのである。おもうに、それは水崎先生のごとき人にして、はじめてできたことなのだ。先生のごとき眞摯純情感恩の人でなくして、誰かこうした点火の大役に、自らたちあがるものがあるだろうか。先生は、一身の犠牲に対しては寸顧も与えることなく、同級生の古谷久綱、三宅驥一らの諸友をはじめ、当時の中堅校友の強い支持協力をえ、そして新島先生の大学運動には、ほとんどその唯一の相談相手となり、先生の嘱をうけて主意書の起草者となり、また、最後には先生の枕辺に侍して、あの遺言の筆記者ともなつた蘇峯徳富大先輩を、陣頭に押したて、ついに四三年三月には、早くも蘇峯の起草になる「二人同心、其利断金」の一句にはじまる趣意書をかかげ、先師新島先生の遺志を奉じて、同志社大学基金三〇万金の募集運動に着手したのである。

* *

かくて水崎先生は、この大学基金募集のため、幾多の勞苦困難を経験しながらも、国内はもとより、遠く外地にまでも遊説に出かけたのである。おそらく先生は、先師の大学運動を、自らの経験によって、しみじみと偲ん

だことであらう。そして先生は、何としてでも募金目標を達成して、先師の大理想を実現しなければならぬと、それこそ、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、この大学募金のため東奔西走、心身休養の暇さえもつことができなかったのだ。

下に掲げる書簡は、昭和六年三月二八日付で、先生が筆者に送られた書簡であるが、この書簡こそ、何よりも先生が如何なる人であったかを知ることのできる、最もよき材料であると考へる。

『(前略) 微力同志社の厚大なる奉公の誠を致す能はざりしと雖も、四拾社時遠遊に上りし時に、勿論、身命を賭し、斯業大成せざんば、先師新島先生在天の靈に對する能はざる覚悟は致し居候。

御承知の通り、性蒲柳、胃腸は普通より劣弱なりしを以て、常にパンを携帯して、多くは同志社校友の家か、満州朝鮮台湾の如きは、時に、小生の暫く教授したる、東洋協会学校卒業生の宿舍に泊り、巡遊致し候。一度朝鮮より満州に入りし時は、頻りに腹痛を覺へたるを以て、途次、五柳背の温泉に二泊して休養したるが、此際前程図るべ

からざるを感じたるを以て、後事を友人古屋久綱君に托し、万一の場合に処するの計を致したる事有之候。

奉天長春を経て、営口に出でし時は、三宅駿二君同地に在り、爾來嚮導の任は、同兄當り呉れ、天津北京等の滞在費用及び汽車汽船賃は、一切同兄負担し呉れ、今に同兄の厚情に對しては、何の辞を以て謝意を表すべきかを知らざる程に有之候。

世間的の一割二割を募金費に當つる如き事なれば、募金も一のビジネスの如くなれども、小生の如き托鉢乞錢、亦風流と申す如き画姿をヴィジョンとして邁進致し、中国各州、朝鮮満州北清を巡旅して帰來、今井会計より実費を頂きたる額は、七拾有三円位と記憶致し候。

平生同志社の爲に計りて智慮足らず、忸怩たる感強きもの有之候が、同志社の友人が小生を憐み、同志社として、基督教主義の学校に卒先して大学を設立し、一頭地を抽んずるに至らしめたるもの、勿論、新島先生不朽の大精神に依るなれども、又小生が、此貧乏旅行にも幾分關係することを、御諒知し被下候はば、身に余るの幸榮と存じ

候処に有之候。(中略)

當時の事は、全く小生のか弱き身軀を同志社に捧げ、貧乏旅行——何時でも三等汽車——をなせし為、人の憐愛を受けたる事と御承知被下候様願上候。

大兄の如き、今や四十代に入りしか、入らんとする方々に、何卒同志社の為には、貧を忘れ、身を以て御尽粹被下候はば、必ず感應有之之事と、御諒知被下候事、懇請至極に奉存候(下略)』

これによつてもわかるが、先生は新島先生の遺志実現のためには、全くその身を命を献げて、もつて同志社大学基金募集のため、日夜勞苦して休むことがなかったのである。そうした先生の献身的精神は、それは実に、先生が、彼等は世より取らんとす吾等は世に与へんと欲す」といふ、先生の遺された一大標語の実践であつたとも考えられる。そして、先生の実践、その献身的勞苦は、ついに酬いられる日がきたのである。四四年一月二三日、同志社理事会は正式に、同志社大学の設立を決議した。続いて翌四五年五月二〇日には、大学開校の盛大な式典をあげるに至つた。この日この時を迎えることができたこと

は、同志社に關係あるもののすべてが、心からよろこび、且つ、感謝するところであつたが、わけても、水崎先生の感謝感激は限りなきものがあつたことと察せられる。先生は先生新島先生のように、感激性の強い人であり従つてまた、先師にもおとらない涙の人であつた。おそらく先生は、開校の式典には、始終涙をもつて、その眼は沾みくらされていたのではあるまいか。

* * *

かくて、新島先生の没後二二年にして、再興發足した同志社大学は、歩々ふみしめながら、堅実な前進を続けていたのであるが、はなはだ遺憾なことには、大正六、七年にかけて、あの同志社紛擾が起こつたのである。しかもその紛擾は、悲しむべきことには、ついに多くの犠牲者を出した。得がたい新島直門の良教師をうしなつた。わが水崎先生もまたその中の一人であつたことは、今日なおわれわれの胸を痛ましめる。

先生は七年の一月、ついに当局に辞表を提出した。それと同時に「同志社を去るの辞」と題する長文の理由書を發表したのである。

『明治四十一年四月、先輩及友人の勤誘に

依り、母校たる同志社に來りて、微力を尽せしより茲に九年十月、過去を顧みれば……幸に大なる過誤なく……幾分の貢獻をなし得たる……』

と、これがその書き出しであるが、先生自らは「大なる過誤」がなかつたという。しかし事實は大なる過誤ではなく「大なる功績」があつたことは、何人といえども、ひとしく認めるところである。また、「幾分の貢獻」をすることができたというが、先師の志は、実に、水崎先生その人の点火によつて、はじめて先師の没後二〇年にして燃えあがつたのである。この意味において、先生の貢獻はまことに大であつて、永久に先生の功績をたとうべきである。同志社よ、決して先生ありしことを忘却してはならない。

先生は、悲しくもいまわしい思い出を胸にいだいて、母校を去つたのち、幸いにして先生に深い信頼をもつた財界の巨頭淺野総一郎翁の理解ある援助により、横浜に淺野綜合中学校を設立、そして最も特色ある教育に、その生涯をささげることになつたのである。

(同志社普通学校・専門学校・大学神学部及び法学部に学ぶ。現在新島全集編集に従事)